



Title	ウズベク語におけるクルアーンの解釈と翻訳について
Author(s)	アブドゥルマジード, ハサンハン・ヤフヤー; ABDULMAJID, Hasanxon Yahyo; 木村, 暁//編訳・注釈 他
Citation	日本中央アジア学会報, 15, 23-52
Issue Date	2019-07-31
DOI	https://doi.org/10.14943/jacas.15.23
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/88380
Type	journal article
File Information	JB015_002abdulmaji.pdf



慈悲深く慈愛あまねき神の御名において⁽¹⁾

ウズベク語におけるクルアーンの解釈と翻訳について

アブドゥルマジード・ハサンハン・ヤフヤー*

編訳・注釈: 木村 暁**、和崎 聖日***

序文: 和崎 聖日***

編訳者序文

本稿は、2019年2月時点においてタシュケント市内のアフマドジャー・カーリー集会モスクのイマーム・ハティーブ(説教師)補佐を務める、クルアーン学者ならびにハディース学者のハサンハン・ヤフヤー・アブドゥルマジードによるウズベク語の論攷(2016年5月29日脱稿)である。このモスクはウズベキスタン・ムスリム宗務局の管轄下の数あるモスクの1つであり、したがってこのイマーム・ハティーブ補佐職も宗務局の任命によっている。彼は、1981年1月12日にフェルガナ盆地のアンディジャンに生まれ、13歳でクルアーンのスーラ(神の徴たる章句)⁽²⁾をすべて暗唱したカーリー⁽³⁾である。ハーフィズ⁽⁴⁾としても名高い⁽⁵⁾。ハサンハン・カーリーの家系は、少なくとも11世代、すなわち約200～250年間にわたって余多のイスラーム学者が輩出した、ア

- (1) イスラーム教徒の著述における伝統的な形式に則って、著者によりこの文言が題目の前に書かれている。なお、本稿における注釈はすべて編訳者による補足である。本文中における編訳者による補足は亀甲括弧内に記す。
- (2) 本稿では、原文での文脈に応じて、「スーラ」ではなく「章」と訳し分けた箇所もある。
- (3) 以下、本稿では「ハサンハン・カーリー」と記す。なお、カーリーはクルアーンの暗唱者への尊称である。原義は「クルアーンを誦み聞かす者」である。現代ウズベキスタンでは、宗務局に属するそのような資質を認められた宗教学者の公的な肩書としても用いられる。
- (4) 原義は「保つ者」である。転じて、クルアーンの暗唱者を指す。この意味でのハーフィズはカーリーと同義である。ただし、とくに11世紀以降の中央アジアでハーフィズは、古典叙情詩や叙事詩を暗記し、それに旋律をつけて謳うすぐれた朗誦者を指す場合もある。またこの意味では、旋律をつけてクルアーンを美しく朗誦する者にもあてはまる。そのほか、ハディース学の分野で傑出した知識をもつ者をハーフィズと呼ぶこともある。
- (5) ハーフィズとして著者ハサンハン・カーリーは、2005年にサウジアラビアのマッカで開催された第27回アブドゥルアズィーズ国王杯国際聖なるクルアーン大会に出場した。また2009年には、第19回ウズベキスタン・クルアーン大会の共和国大会で優勝した。今日では、ウズベキスタン・ムスリム宗務局付属ウズベキスタン・クルアーン大会組織委員会の委員長代理も務めている。

ンディジャンの宗教的名家である。たとえば、父ヤフヤーハンはブハラ市のミーリ・アラブ・マドラサでイスラーム諸学を学んだカーリーであり、また父方の曾祖父アブドゥルマジードはロシア帝国末期のアンディジャンで最も著名なカーディー（イスラーム法の裁判官）であった。

クルアーン学の最初の師であった父は1989年、彼が8歳の時に急逝した。その後、ハサンハン・カーリーは、当時のアンディジャンにおいて最も名高いクルアーン学者であったバドリッディーン・カーリー・カマリッディーン・オグリ(1946～2014年)⁽⁶⁾に師事し、フジュラ(政府未公認の私塾の総称)でクルアーン学を学んだ。この第2の師から、クルアーンの正統7読誦法の1つであるイマーム・アースィム・イブン・アブー・ナジュド・ターフィー(746年没)⁽⁷⁾による読誦法の2つの流派(ハフスとシュウバ)の教導の免状を得た。またイブン・ジャザリー⁽⁸⁾の『タジュウィード⁽⁹⁾序説』の教導の免状も別の師から得ている。ハサンハン・カーリーの筆になるクルアーン読誦学の書籍もいくつか刊行されている。そのほか、ハサンハン・カーリーは双子の弟フサインハン・カーリーとともにクルアーンを読誦し、その音源を収録したCD『聖なるクルアーンを読誦』(タシュケント: Semurg' media, 2011 (et al.) 年)を発売したほか、ソ連時代の著名なカーリーたちによるクルアーン読誦の音源を収録したCDシリーズ『不滅の響き』(タシュケント: Semurg' media, 2017 (et al.) 年)も企画した。

クルアーン学以外のイスラーム諸学に関して、ハサンハン・カーリーは政府公認のイスラーム教育機関イマーム・ブハーリー名称タシュケント・イスラーム高等学院で学び、2008年に同学院を修了した。その一方、今日のウズベキスタンで最も権威のあるイスラーム学者と評されるアンディジャン出身の故ムハンマド＝サーディク・ムハンマ

(6) バドリッディーン・カーリー・カマリッディーン・オグリの師は、第2次世界大戦後のウズベキスタンで最も傑出したカーリーとしてその名をはせたアンディジャン出身のムハンマド・ムビーヌ・カーリー・アミンジャン・オグリ(1914～76年)である。ハサンハン・カーリーの妻は、ムハンマド・ムビーヌ・カーリーの孫娘にあたる。

(7) クルアーン読誦学では、正統7読誦法のそれぞれの創始者あるいは名祖はイマームと呼ばれる。イマーム・アースィムは、クルアーン読誦法をズィッル・イブン・フバイシュとアブドゥッラー・イブン・マスウード、アブドゥッラー・イブン・ハビーブ・スィルミーから学んだ。最後の人物はクルアーン読誦法を第4代カリフのアリーから学び、アリーはそれを預言者ムハンマドから学んだという(“Qiroatlar va qorilar,” URL: <http://islom.uz/maqola/654>, 閲覧日: 2019年1月5日)。

(8) ダマスカス出身のハディース学者・シャーフィー派法学者(1350～1429年)。本名はムハンマド・イブン・ムハンマド、尊称はシャムスッディーン。クルアーン読誦の音声論にとりわけ精通していた。ダマスカスのシャイフ・アルクッラー(カーリーたちの長)も務めたことが知られる。

(9) クルアーンを読誦するための音声の心得。学芸としてのクルアーン読誦法の基礎分野をなす。

ド＝ユースフ(1952～2015年)⁽¹⁰⁾にも師事し、ハディース学を中心にイスラーム諸学を学んだ。ハサンハン・カーリーは、彼からムハンマド・イブン・イスマイル・ブハーリー(810～70年)の『真正集』とムスリム・イブン・ハッジャージュ(817/21～875年)の『真正集』、イマーム・ナワウィー⁽¹¹⁾の『アルバイーン』(40のハディース撰集)の教導の免状を得ている。2012年から刊行されはじめた『ブハーリーの真正集』(全8巻、「黄金の系譜」叢書、タシュケント刊)の翻訳者兼編集者の1人であるほか、著作として、著名な文人アリーシェール・ナヴァーイー(1441～1501年)によって韻文化された「40のハディース(アルバイーン)」に対する注釈書である『ナヴァーイーより旋律見ださまほしければ』(フサインハン・カーリーと共著、2014年タシュケント刊)がある。そのほか、ハサン・イブン・ジャアファル・バルザンジー⁽¹²⁾の『輝ける預言者の生誕日における宝石の首飾り』と題された著作のウズベク語訳注『マウリド』[Barzanjiy 2015]も著している。

⁽¹⁰⁾ 以下、ムハンマド＝サーディク・ムハンマド＝ユースフの略歴について、おもにマーサ・オルコットの研究に依拠しながら紹介する[Olcott 2012]。彼は、沈黙のズィクル(神の想起)をおこなうナクシュバンディー・ムジャッディディー教団のイシャーン(導師)の血統に連なる宗教的名家の出である。彼の父ムハンマド＝ユースフ・カーリーは、中央アジア・カザフスタン・ムスリム宗務局の初代ムフティー(局長)、イシャーン・ババハンによって、1950年にミーリ・アラブ・マドラサにクルアーン学の講師として招聘され、またバハーウッディーン・ナクシュバンド廟の管理も任されていた。ムハンマド＝サーディク・ムハンマド＝ユースフ自身は、幼少期に父から教育を受け、さらに本稿中に述べられるとおりの学歴と職歴を重ねたのち、1989年3月、ムスリム宗務局の第4代ムフティーに選出され、同年中にソヴィエト社会主義人民共和国最高会議の議員にも選出された。海外のムスリム使節団のソ連来訪時には、ソ連共産党書記長ゴルバチョフの個人通訳も務めた。しかし、汎イスラーム主義を提唱した19世紀のアフガーニー(1838/39～97年)を支持するアンディジャン出身のアブドゥヴァリー・カーリーらのイスラーム主義諸集団が国内で勢力を伸ばし、この勢力をムハンマド＝サーディク・ムハンマド＝ユースフが抑えられなくなったことを理由に、ウズベキスタン当局は彼を逮捕する準備をはじめた。結果的に、彼はムスリム宗務局の資金横領の嫌疑をかけられ、1993年4月にムフティー職から公式に解任された。しかし、彼の妻方の家族、すなわちなマンガンの宗教的名家であるサッティエフ家の助けによって逮捕を免れ、国外追放処分となった。その後、彼はシリアとリビアの知人の勧めでリビアに移住し、そこを拠点としながらアラブ世界を駆け巡ることになる。彼は、ちょうどこの時期に出会ったと推測されるシリアのハナフィー派法学者ムハンマド・サイイド・ラマダーン・ブーティー(1929～2013年)を精神的な師と仰ぐようになる。こうして彼は、イスラームを政治的な運動や党派に分割すること自体がイスラームの知と団結の力を解体させ、ムスリム諸国の現実的な統合と復興を妨げているとする立場をとるようになる。そののち、ウズベキスタンの法務省で高位に就いていた義理の姉の手助けによって、彼は政府の反テロ闘争を支援するという名目のもと、初代大統領イスラーム・カーリーモフから国内復帰の許可を得て、1999年にウズベキスタンに帰国した。それから2015年に死去するまで、彼は在野のイスラーム学者として活躍した。なお、生没年の表記についてこれ以降、ヒジュラ暦から起算して西暦の2年にまたがる場合、あるいは複数の可能性のうち判断のつかない場合には「/」で記す。

⁽¹¹⁾ ダマスカスのナワー出身のハディース学者ならびにシャーフィイー派法学者(1233～77年)。

⁽¹²⁾ マディーナ出身のクルアーン学者、シャーフィイー派法学者ならびにスーフィー(1714～64年)。フサイン・イブン・アリーに血統に連なる預言者ムハンマドの子孫の1人である。彼のニスバ(由来名)は、イラク北部の町シャブラズールに属する村の1つであったバルザンジャに由来している[Barzanjiy 2015: 45–47, 49]。

こうした経歴と業績をもつハサンハン・カーリーがなぜ「ウズベク語におけるクルアーンの解釈と翻訳について」と題した論攷を書いたのか、その動機について本人の弁を借りて簡単に説明しておこう。端的に言えば、「クルアーン(とハディース)の翻訳は許容されない」という立場をとる人々が昔も、そして今も中央アジアのムスリム社会に一定数存在するからである。彼らによる異議申し立ての中心となる主張は、クルアーンの真正性と奇跡性は他言語への翻訳によって破綻するという点にあるとされる。こうした異議申し立ては、彼の師の1人であるムハンマド＝サーディク・ムハンマド＝ユースフにも向けられていたという。その彼が2015年に逝去したのち、同郷出身の師の遺志を継ぐ弟子の1人であり、またクルアーン学者でもあるハサンハン・カーリーは、クルアーンを翻訳することの宗教・歴史的な正当性を明示するために、本稿を著したと言えるだろう。その視線はトルコ人東洋学者アブデュルカーディル・エルドアンらの学術的研究にも向けられている。

ソヴィエト体制下の中央アジアでは、スターリンの大粛清を中心に無数のイスラーム学者の命が絶たれ、ムスリム社会内におけるクルアーンの知識は必然的に弱まっていった。しかし、ゴルバチョフのペレストロイカ後期にイスラームが公式に復活していき、みずからの民族文化たるイスラームに回帰しようとする人々の思いは大きくなって高まっていった。このことを背景に、ウズベキスタンでは1991年からムハンマド＝サーディク・ムハンマド＝ユースフらイスラーム学者たちがクルアーンの翻訳・解釈書を上梓しはじめた。世俗主義を大原則とするウズベキスタン政府もまた、新たな国家建設の試みのなか、国内のムスリム社会の分裂を防ぎ、その統合を保持するため、国民の大多数を占めるムスリムから支持されるイスラーム学者によるクルアーンの翻訳・解釈書を必要としていたにちがいない。これら3者、すなわち宗教学者、民衆、政府をめぐる状況の基本的な構図は今も変わらない。

本稿は、まさにこうした時代の要請に応えるべく、ムスリム大衆に向けてクルアーンの翻訳と解釈が宗教的に正当な知的営為であることを説きつつ、その歴史的展開が概説される内容となったのである⁽¹³⁾。またハサンハン・カーリーの現在のウズベキスタンでの立ち位置にかんがみれば、本稿をとおして、政府公認のイスラーム学者のあいだで一定程度共有されているクルアーンの知をめぐる見解を知ることもしる

⁽¹³⁾ 本稿のウズベク語原文は、ウェブサイト“QURAN.UZ”にはほぼそのまま掲載されており、参照可能である (URL: <http://quran.uz/tafsir/tafsirlar/tafsir-hilol/1891-ozbek-tilidagi-quron-tafsirlari-va-tarjimalari-haqida.html>, 閲覧日: 2019年1月25日)。ただし、編訳者が日本語への訳出にあたって依拠したテキストは、これに著者自身が若干の修正を加えたものであることをことわっておく。なお、著者から本稿の日本語訳の刊行について許可を得ていることもここでことわっておきたい。

う。さらにそこからは、現地のムスリム社会内部においてクルアーンをめぐる見解が
 一様ではない実態もうかがい知ることができよう。そもそも著者が、形式的にせよ、
 読者をウズベク・ムスリムに絞るかたちでこの問題を論じていること自体も興味深い。
 このことは祖国愛と宗教信仰の調和を示すとも言えるかもしれない。また、ウズベク・
 ムスリムがウズベク語の解釈書や翻訳書を通じてクルアーンの意味を知り、信仰実践
 の糧とすることは正当な行為である、との著者の説示が、極端な原理主義や過激思想
 の抑止・根絶という、社会平和実現のための喫緊の課題によって動機づけられている
 ことも読みとれるだろう。こうした論点は、これまでの日本の中央アジア研究であまり
 注目されてこなかったものである。それゆえ、本稿はこれまでの研究史の間隙を埋め、
 その蓄積に貢献するものであると考える。これが編訳者の翻訳意図である。

最後に、この「編訳者序文」も含め本稿では、中央アジア・イスラーム史上の人名や
 書名がたびたび言及されているが、それらについて注記するにあたっては、おもに『岩
 波イスラーム辞典』[大塚ほか 2002]、『中央ユーラシアを知る事典』[小松ほか 2005]、『イ
 スラーム事典』[Mansur 2017]等を参照したことをこわっておく⁽¹⁴⁾。なお、以下の本
 文において、著者ハサンハン・カーリーがたんに解釈書ないし翻訳書と言っているのは、
 クルアーンの解釈書と翻訳書である。

はじめに

御自身の最後の啓典を人類のために不滅の精神的な鉱石として啓示したわれらが主、至高
 なるアッラーに賞賛あれ！ この神からの賜物を無償で人類と分かち合った、愛しきわれら
 が預言者ムハンマド・ムスタファーに祝福あれ！⁽¹⁵⁾

至高なるアッラーは御自身の最後の完成された宗教であるイスラームを全人類のための宗

⁽¹⁴⁾ 人名や書名について、本稿で取りあげられるもののうち、注釈をつけていない箇所もあるが、それらにつ
 いては読者に委ねたい。また書名の表記について、二重鉤括弧内には原則的に邦訳だけを入れた。ただし、書
 名としてカタカナ転写が広く知られているものや訳しきれないものに関してはカタカナで表記することにし
 た。なお、ウズベク語原文中にみられる明らかな誤植ないし誤記は、これをこわりなく訂正したうえで翻
 訳した箇所もある。

⁽¹⁵⁾ スンナ派における伝統的な形式に則って、神と預言者ムハンマドを讃美する文言からはじまる。シーア派の
 場合、こうした文言に4代目カリフのアリーの名も入るのが一般的である。

教としてもたらし、その最高位の源である聖なるクルアーンをもすべての民族にとって共通の行動規範として定めたまうた。以前の啓典がとある種族と民族にもたらされた一方、聖なるクルアーンの呼びかけは全人類に向けられた。それゆえ、すべての民族と部族にとってクルアーンの意味を学び、それを実践することが必要となった。しかし、クルアーンはアラビア語でのみ啓示されたのであった。この言語で話すことのできない諸民族がクルアーンを理解するためには、みずからアラビア語を学ぶか、クルアーンのアーヤ〔神の徴たるスーラすなわち章句を構成する各節〕⁽¹⁶⁾を自分たちの言語に翻訳する必要が生じた。老いも若きも、男も女も、労働者も上役も、皆がおなじようにアラビア語を学び、それを通じてクルアーンの意味を習得することは困難であり、むしろ不可能であるだろうことは、証拠立てるの必要のない真実である。

とりわけアラブ人ではない諸民族にダアワ〔教宣〕し、また彼らのうちの新参のムスリムに宗教を教えるには、クルアーンの意味を翻訳する以外に手段はない。だからこそ、聖なるクルアーンは、地上にはじめて啓示された頃から、他言語に翻訳されるようになった。直接的には、クルアーンはわれらの預言者ムハンマド——彼に祝福と平安あれ——の御教導と御推奨によって、ダアワのなかでその一部のアーヤがアラビア語から他の言語に翻訳されるに至った。かの御方は、人々にイスラームの教えを伝えるなかで、その必要性が生じた場合、クルアーンの一部のアーヤを他の言語に翻訳させ、またその許しを乞う者たちに許可もお与えになった。

偉大なるわれらが同胞ムハンマド・イブン・イスマーイル・ブハーリー——彼に神の慈悲あれ——は、『真正集』の末尾付近のある章のなかで、「至高なるアッラーの『もしお前たちの言葉が真実であるのなら、律法をもってきて朗読してごらん』（イムラーン家章第93節）というお言葉にしたがって、律法とそれ以外のアッラーの啓典をアラビア語と他の言語で解釈することが許容されることについて」という表題を立てたうえで、以下のハディース〔預言者ムハンマドの言行録〕を引用する⁽¹⁷⁾。

イブン・アッバース——彼に神の御満悦あれ——がアブー・スフヤーン・イブン・ハルブから伝えるところによれば、ヒラクル⁽¹⁸⁾が通訳を呼び、預言者——彼に祝福と平安あれ——の手紙をもってこさせた。彼はそれを読んだ。「慈悲深く慈愛あまねきアッラーの御名において。アッラーの僕にして使徒たるムハンマドよりヒラクル閣下へ。「聖典の民⁽¹⁹⁾

⁽¹⁶⁾ 本稿では、原文での文脈に応じて、「アーヤ」ではなく「節」と訳し分けた箇所もある。

⁽¹⁷⁾ クルアーンは原則的に井筒訳を参照した。ただし、編訳者の判断によって、部分的に原文に近いかたちでクルアーンを翻訳している箇所があることもことわっておきたい。

⁽¹⁸⁾ 東ローマ皇帝のヘラクレイオス（在位 610～41年）を指している。

⁽¹⁹⁾ ユダヤ教徒とキリスト教徒を指している。

よ！ 私たちとあなた方とのあいだに何の差別もないお言葉のところにおいて……」(イムラーン家章第64節)。

この伝承から明らかなように、アッラーの使徒——彼に祝福と平安あれ——が異教徒をイスラームへ招喚しながら差し向けた手紙にはクルアーンのアヤもあり、それを届けた使節、または手紙を受け取った側の通訳も翻訳したのであり、アッラーの使徒——彼に祝福と平安あれ——はこれを否定せず、むしろ承認なされた。イマーム[導師]・ブハーリーは上記の章でまた、アッラーの使徒——彼に祝福と平安あれ——がユダヤ教徒とのあいだで仲裁人であった頃、彼のために律法の一部の章句が翻訳されたことも表題の言葉のなかに証拠として引用しているのである。

イマーム・サラフスィー⁽²⁰⁾は、『マブスート』と題された多巻からなる有名な自著の「礼拝の書」章([アラビア語刊本]第1巻37頁)において、以下の旨を記している。「伝承によれば、ペルシア人たちはサルマーン・ファーリスィー⁽²¹⁾——彼に神の御満悦あれ——に手紙を書き、自分たちのために開扉章をペルシア語で書いてくれるよう依頼した……」。タージュッシャリーア⁽²²⁾が著した、『ヒダーヤ』に対する注釈書『ニハーヤ』([アラビア語刊本]第1巻86頁)は、このことについてより詳しい情報を与える。

[ペルシア人は]サルマーン・ファーリスィー——彼に神の御満悦あれ——に開扉章をペルシア語で書いてもらうよう頼み、手紙を書いた。そのとき、彼は「慈悲深く慈愛あまねき神の御名において」[というアラビア語の文言]に対して「バ・ナーミ……」⁽²³⁾と[ペルシア語で]書き、預言者——彼に祝福と平安あれ——にそれを見せたのち、彼らに送った。

つまり、偉大な教友[サルマーン・ファーリスィー]はアラビア語を知らない自身の同族に聖なるクルアーンの意味を翻訳してやり、このことをアッラーの使徒——彼に祝福と平安あれ——は承認なされたようである。

⁽²⁰⁾ ホラーサーン地方で活躍したハナフィー派法学者(?~1090/97年)。

⁽²¹⁾ イランのイスファハーン近郊出身の活動家・学者(?~655/56年)。ムハンマドの教友の1人であった。タサウウフ(スーフイズム)やシーア派運動の創始者の1人とみなされている。

⁽²²⁾ 「タージュッシャリーア」(「聖法の王冠」の意)はブハラのマフブービー家のハナフィー派法学者、シャムスッディーン・マフムード(1238年没)の尊称。12世紀から14世紀前半にかけてのブハラはブルハーン家、マフブービー家という名家の相次ぐ実効支配下にあったが、この時期同市では両家の成員らによってハナフィー派法学書の編纂事業が旺盛に展開され、そこで創出された法学書(主として『ヒダーヤ』の注釈や提要の類)は中央アジア域外のハナフィー派圏にも広く普及した[McChesney 1998: 37-47]。

⁽²³⁾ アラビア語の「慈悲深く慈愛あまねき神の御名において」という唱句(バスマラ)のペルシア語における対訳、「ba-nām-i khudāy-i bakhshanda-i mihrbān」(構成語句にはいくつかのヴァリエーションがありうる)を指している。

われわれの故郷がイスラームの光によって照らされた最初期からすでに、われらの民族にクルアーンの内容は翻訳されていた。イスラームの征服者たちがわれらの地にはペルシアのくに通って入ってきたため、彼らのなかにはペルシア人やペルシア語を知っている者が多かった。われわれの先祖は昔からペルシア人と隣人として暮らし、この地域が長きにわたりペルシア国家の統治のもとにあったことから、この地の民族はペルシア語に通じるようになった。これらの要因ゆえに、クタイバ・イブン・ムスリム⁽²⁴⁾——彼に神の慈悲あれ——に率いられてきた征服者たちは、われらの郷土において最初にムスリムになった住民のためにと、クルアーンのスーラをペルシア語に訳してやった。アラビア文字を習得するまでは、その内容の翻訳を読誦することさえも許可された。このことは、クーファのファキーフ〔法学者〕たちのファトワー〔法学者がイスラーム法に則して出す見解〕にもとづいていた。

しばらくののち、聖なるクルアーンのテュルク語への翻訳も開始された。テュルク語学者にして言語学博士の故カザクバイ・マフムードフが強調するところによれば、クルアーンのテュルク諸語による解釈はヒジュラ暦3～4世紀頃、あるいは西暦で言えば10世紀頃にはじまった。クルアーンは時代を通じて、多様な著述家によりさまざまな水準でテュルク諸語、とりわけ古テュルク語⁽²⁵⁾で解釈されてきた。それらの多くはおもに〔ウズベキスタン〕国外の図書館で保管されている。いくつかの資料で強調されることによれば、今日世界の諸々の写本所蔵機関では100に近いテュルク語による解釈書と翻訳書の写本が存在する。

前世紀のはじめ頃に生き、著述活動をおこなったわれらがタフスィール〔クルアーン解釈学〕学者たちのうち、ムハンマド・ザリーフ・カーシュガリーは、みずからの解釈書のなかで、テュルク諸語で書かれた解釈書を28ほど数えあげている。その解釈書のうちの最古の諸写本に関して、トルコ人学者アブデュルカーディル・エルドアンも数多くの学術的考究をおこなった。アラビア文字で書かれた最古のテュルク語の解釈書としてアブー・アリー・ジュッバーイー・フーズィスターニー（西暦916年没）の著作が言及されているが、この解釈書のいかなる写本もまだ見つかっていない。また初期のテュルク語の解釈書のうち、いくつかの断片も保管されているが、それらは取りあげるにはおよばない。われらの祖国においてアラビア語で記された解釈書はひじょうに多い。そのうえ、たがいに同系のテュルク諸語、すなわちトルコ語やタタール語、カザフ語、クルグズ語の解釈書と翻訳書もおびただしい。しかし、ここでわれわれは、テュルク・ウズベク語で今日に至るまで著されてきた解釈書と翻訳書のうち、われわれにとって周知のものについてのみ語ることにする。

(24) ウマイヤ朝の総督として中央アジア(マーワラーアンナフル)征服を指揮し、のちにホラーサーン総督となった人物(669～715年)。

(25) 著者ハサンハン・カーリーが古テュルク語と言っているのは、アラビア文字表記のテュルク語のことである。

〔通称〕『中央アジア・テュルク語解釈書』〔*O'rta Osiyo turkiy tafsiri*〕

現段階においてわれわれにとって周知の最古のテュルク語の解釈書は、勤儉力行の学者カザクバイ・マフムードフによって刊行の手はずを整えられた『中央アジア・テュルク語解釈書』である⁽²⁶⁾。その著者は不明である。いくつかの情報によれば、それはイマーム・ザマフシャリー⁽²⁷⁾の弟子の1人の筆によると推測されている。写本の冒頭は欠損し、翻訳と解釈は洞窟章からはじまり、クルアーンの最後までつづいている。この貴重な解釈書は、クルアーンそれ自体を学ぶためだけでなく、テュルク語で話す諸民族の言語史を学ぶうえでも重要な意義をもつ。この解釈書について同研究者が導入部で記している情報のうち、われわれにとって今必要となるいくつかの箇所から引用して示す⁽²⁸⁾。

ロシア〔科学アカデミー〕東洋学研究所サンクト・ペテルブルグ支部で保管されている第197番『テュルク語解釈書』⁽²⁹⁾をゼキ・ヴェリディ・トガン〔ヴァリドフ〕が1914年にカルシで発見し、ブハラ・アミールの図書館にもっていき、寄贈した⁽³⁰⁾。この解釈書は言語的特徴の観点から、10～14世紀頃に書かれた諸文献と近い関係にある。『テュルク語解釈書』は分量の観点から、相当に大きめの文献の1つとみなされる。この著作は294頁〔すなわち147葉〕から構成され、判型は中程度のサイズをもつ。同書では79章分の解釈がなされている。その最初の部分では、全頁に10行ずつ〔クルアーンの〕スーラが書かれている。引用されたスーラの上部に小ぶりのナスターリーク体でテュルク語による注解がなされている。スーラの一部ではテュルク語による注解とともにペルシア語による注釈もなされている。

この著作では、最初の100頁に書かれているスーラのすべてのアラビア語の単語の上

- (26) これは『テュルク語解釈書(12～13世紀)』(2000年タシュケント刊)[Mahmudov 2000]を指すと考えられる。
- (27) ホラズム出身のタフスィール学者ならびにアラビア語文法学者(1075～1144年)。クルアーンの解釈書『啓示の真理を開示するもの』において言語学的方法によるクルアーン解釈の道をひらくなど、すぐれた業績を数多く残した。
- (28) ここでの引用元は、基本的にマフムードフ編前掲書の導入部であるが、原文が要約されたかたちとなっている。
- (29) このテュルク語写本は、発見当初からロシア・ソ連内外の東洋学者のあいだで注目を集め、やがてロシア語で『中央アジア[出自]の解釈書』(Sredneaziatskii tafsir (/tefsir))と通称されるようになった。ウズベク語による『中央アジア・テュルク語解釈書』という通称もおそらくこれによる。この写本については早くから何人かのテュルク学者が言語学的研究に取り組んだが、その語彙的・音声的・文法的特徴に注目したボロフコフの詳細な研究[Borovkov 1958, 1963]は、本稿では言及されていないものの特記に値する。
- (30) ここには事実誤認が見られる。トガンは1914年にみずから購入したテュルク語解釈書を「ブハラ・アミールの図書館にもっていき、寄贈した」のではなく、公刊された出張報告にも記されるように、サンクト・ペテルブルグに将来した[Validov 1916: 249]。これは現在もロシア科学アカデミー東洋写本研究(改組後の現名称)に“C 197”の所蔵番号のもとで保管されている[Dmitrieva 2002: 173]。

部にテュルク語の翻訳がなされており、これらの箇所ではアラビア語に特徴的な文体に準拠したものになっている。おなじく、つづく200頁からなる部分においてスーラは大きめの紙幅をもって解釈がなされ、各頁には35～40行から構成される、テュルク語に特徴的な散文の翻訳文が位置づけられ、注釈は小さく書かれている。解釈書のテキストにおける散文による翻訳では、テュルク語通有の文体が存在すると同時に、独自性もみとめられる。同解釈書のテキストにおいてはカラ・ハン朝期の諸文献の言語的伝統が優勢であるものの、オグズやキプチャクといった部族の諸語の特徴も存在する。これによって、この解釈書は1つのグループとしてのテュルク系部族集団の諸語の特徴を反映し、また歴史的にウズベク語の発展のありようを示す重要な文献史料の1つとみなされる。この解釈書がウズベク語と有機的な関連性をもつことは、テュルク語本来の諸単語の音声的・文法的・語彙的特徴をとおして表れている。

テュルク語で著された最初期の〔紙媒体の〕文献の1つは、『テュルク語解釈書』であるとみなされる。この解釈書には、オルホン・エニセイ碑文と古代ウイグル碑文、そして11～12世紀の諸文献に特徴的なテュルク語本来の語彙群がみとめられる。おなじく、この著作は宗教哲学と関連していたため、アラビア語とペルシア・タジク語の単語も使用された。同解釈書における言語学的な標識は、一方でオルホン・エニセイ碑文と古代ウイグル碑文を想起させるが、他方では11～14世紀に固有の言語的特徴を表している。トルコの学者F・キョプリュリユザーデ〔ファト・キョプリュリユ〕も『テュルク語解釈書』が10～11世紀に著され、ティムール朝時代に書き写されたと強調する。われわれは、解釈書の音声的・文法的・語彙的特徴にしたがって、この著作が12世紀に著されたものであり、また書き写される時に若干の修正がなされたとみている。同著作の本文の特徴と言語学的諸事実は、第1に13～15世紀の文字記録に適合し、第2に11～14世紀の諸文献の言語との類似性をもつ。第3に、同著作の本文の特徴と言語学的諸事実は古ウズベク語文献と有機的に関連する。第4に、この解釈書は、現在のウズベク語とテュルク諸語の通時的かつ共時的な特徴を明らかにするうえで役立つ。

この研究者は、同著作をととも深く、包括的に研究した。まず音声的転換表記、すなわち転写を準備した。その後、それを生き生きとしたウズベク語に翻訳した。われわれは、その転写をカザクバイ・マフムードフ・ダームツラー⁽³¹⁾から受け取り、電子版を準備した。いくつかの資料で強調されるところによれば、古テュルク語の解釈書のうちのもう1つは、ムハンマド・イブン・ハーッジ・ダウラトシャー・シーラーズィーによって西暦1333年に書

⁽³¹⁾「ダームツラー」とは先生のことを指す敬称である。宗教指導者や学者、教育機関における比較的ベテランの教師などに対して、2人称および3人称で用いられる。

き写されたクルアーンの解釈書であり、現在トルコのテュルク・イスラーム博物館に保管されている。

〔通称〕『カーシュガリーの解釈書』〔Tafsiri Koshg'ariy〕

著者について

前世紀に生き、著述活動をおこなったこの地の学者の1人であり、また「ハージー・カーリー」の異名で名声を博した著述家たる学者ムハンマド・ザリーフ・カーシュガリーは、タシュケント出身のウズベク人である。彼は1872年にタシュケント市で誕生し、ブハラで教育を受けた。学問を修めたのち、カシュガルに移住し、そこで聖なるクルアーンの解釈に着手し、その仕事を完成させた。彼の著作はこのほかにもあると言われる。彼は1959年にグルジャ〔イリまたは伊寧〕で他界した。

著作について

この解釈書は、20世紀前半のウズベク語文章語で著されている。そこでは、まずアーヤの本文が、次にその意味の翻訳が示され、最後に解釈がなされる。この解釈書では、アーヤを〔別の〕アーヤによって注釈する方法が貫かれている。それと同時に、スーラどうしの関連性も明らかにされている。注釈者がアーヤを注釈するさいにハディースを引用するとき、そのハディースについても詳細な議論がなされる。アーヤの解釈においてさまざまな学説がある場合、それを1つずつ提示したうえで、自分が採用する学説について述べ、その正しさを立証しようとする。

著作の刊本について

この解釈書がヒジュラ暦1344年ズー・アルカアダ月21日（西暦1926年6月2日）に書き終えられたことは、著作の最後に記されている。このザリーフ・カーシュガリーの著作のうち、30番目のジュズウ⁽³²⁾の解釈は1987年にカタールで印刷された。解釈書のこのわずかな部分が大判型で735頁を占めることから、この著作の全体がどれほど大きなものであったかが推測できる。この〔カタール〕版の序文で発行者ハサン・アブドゥルハミードは、この解釈書の30番目のジュズウに相当する箇所がカシュガルで1356／1937年に刊行され、また残りの箇所がグルジャ市において写本のかたちで保管されていることを述べている。

(32) クルアーンを30に分けたうちの1部分のことを指す。

〔通称〕『アルトゥンハン・トラの解釈書』〔*Oltinxon to'ra tafsiri*〕

著者について

この解釈書の著者は、中央アジア周辺では「アルトゥンハン・トラ」、パキスタンでは「トラ・サーヒブ」の名で有名であった偉大な同胞サイイド・マフムード・イブン・サイイド・ナズィール・タラーズィーである。この人物は1895年、カザフスタン南部のウズベキスタンとの境の旧タラス（現在のジャムブル）市で誕生した。タフスィール学者、ハディース学者、文人、詩人としての顔をもつアルトゥンハン・トラは、まったくき学者にして献身的な愛国者であった。幼少期からすでに、類まれな才気と磨きぬかれた能力をもっていた。クルアーンの読誦にも長けていた。ハーフィズとサアディーの著作から多くの事柄を暗記していた。この人物は、タシュケントのコカルダシュ・マドラサ、そののちにはブハラのマドラサで学び、アラビア語とペルシア語を十分に身につけた。祖国解放のために学問的・実践的な諸活動をおこない、祖国を賛美して一連の詩を書いた。

サイイド・マフムード・タラーズィーは、聖なるクルアーンをウズベク語に訳した最初の翻訳者である。彼はこの難儀な仕事をインドにいた頃にはじめ、10年間をかけて終えた。アルトゥンハン・トラがその後40年以上つづけることになる学問とイスラーム、ならびに文学と教育にかかわる諸活動は、両聖都すなわち栄光あるマッカと光り輝くマディーナでおこなわれる。主要な著作はここで創作されるのである。彼は〔サウジアラビア〕政府の招待によって、ハラム・シャリーフ〔マディーナ〕でも数年間教鞭をとった。アルトゥンハン・トラには、20点近い著作が存在する。とりわけ『聖なるクルアーンの翻訳・解釈書』、『われらが預言者——彼に祝福と平安あれ——の行状について』、イマーム・ナワウィーの『善良な人々の果樹園』と題された4巻本の著作の訳注、『イスラームの教義』、イマーム・タハーウィー⁽³³⁾の著作である〔通称〕『タハーウィーの信仰箇条』に付した韻文・注釈、アブー・イーサー・ティルミズィーの著作『ムハンマドの美質』の訳注、『マフムードの六行詩』などが挙げられる。アルトゥンハン・トラ——彼に神の慈悲あれ——は、1991年6月26日に栄光あるマッカで逝去した。

著作について

この著作にわれわれは、便宜的に『アルトゥンハン・トラの解釈書』と名づけた。原題は『聖なるクルアーン：トルキスタン語への翻訳・注釈書』と銘打たれる⁽³⁴⁾。アルトゥンハン・ト

(33) エジプトのタハー出身のハナフィー派法学者(844/5・523～933年)。

(34) 編訳者の手元にある1975年刊カラーチャー版の標題紙によれば、同書のアラビア語原題は『聖なるクルアーン』であり、サイイド・マフムード・タラーズィー「の筆によりトルキスタン語で翻訳および注釈がなされた」旨が(副題というよりは)責任表示として添え書きされているものと理解することもできる〔al-Tarāzī al-Madani 1975〕。

ラ——彼に神の慈悲あれ——は同胞の勧めに触発され、宗教的な必要性が生じていたことへの配慮から、聖なるクルアーンの〔アラビア文字〕テュルク語への翻訳と解釈をおこなった。この著作は当時、ウズベク語読者の手元に置かれる、母語でなされた唯一の解釈書であった。著者のイニシアティブとこの地の宗教指導者たちの尽力によって、すでに旧ソ連期に、この解釈書はウズベキスタンにもちこまれ、比較的狭い範囲ではあれ解釈書読者層のあいだで頒布された⁽³⁵⁾。それは当時、この地のムスリムにとって大いなる知らせであった。とりわけ、知識のある信奉者たちにおいては大きな喜びと関心を引き起こした。当時の学徒の一部は、その著作が宗務局にもちこまれたことについて聞くやいなや首都に向けて歩を進め、その解釈書を手にとり、目に押しあて、ひじょうなる高揚感とともに帰っていったのである。

外国で刊行されたこの著作のすべての版は、アラビア文字、すなわち古テュルク語のために用いられたアルファベットで印刷された。そのさい、聖なるクルアーンの本文の各行の下にアーヤの意味の翻訳が付された。解釈と注釈は、頁の縁周りの場所を占めた。同著作は、このように約1世紀前のウズベク語で記されていた。この解釈書に特徴的な点は以下のとおりである。すなわち、それは大衆向けで庶民を対象としていることである。そこでは、アーヤはやや自由に翻訳され、必要に応じてアーヤには短い解釈が付されている。提示されている情報にはときに典拠が示されているが、読者を煩わせないように、多くの場合、典拠についての言及はされていない。同書は、格調あるウズベク語の文体において傑出している。

著作の刊本について

この解釈書は、1956年にボンベイ、1975年にカラーチー、1980年にジッダ、また1993年にカタールで印刷された。その後、2006年にはハージー・イスマトウツラー・アブドゥウツラーにより、この解釈書のキリル文字の版が準備され、タシュケントで刊行された⁽³⁶⁾。

⁽³⁵⁾ 『アルトゥンハン・トラの解釈書』は、公式レベルではソ連中期に中央アジア・カザフスタン・ムスリム宗務局を訪問したサウジアラビアの使節団によってもちこまれたと言われる。その頃から1979年頃まで、この解釈書がウズベキスタンで最も権威あるものと評されていた。

⁽³⁶⁾ 編訳者の手元にあるおなじ翻訳者による解釈書のキリル文字の版は2002年に出版となっている。このことから、原文にある「2006年」との出版年は誤植である可能性が高い。

『クルアーンの翻訳における弁別的説述』〔*Bayonulfurqon fi tarjimatilqur'on*〕⁽³⁷⁾

著者について

著者は、「ヒンドゥスターニー・ダームッラー」や「ハージー・ヒンドゥスターニー」、「マウラヴィー・ダームッラー」といった名で名声を博し、中央アジア周辺で学問と教養の光輝を広めることに比類ない貢献をなした大学者、偉大な師ムハンマドジャー・ダームッラー・マウラヴィー・ムッラー・ルスラム・オグリ・ホーカンディーである。この人物は1892年にコーカンド地方のホージャ・ムハンマド・ヴァリー廟の近くのチャール・バーク村で教養ある家庭に生まれた。両親は知を探究していたことから、わが子が幼少期から知を習得するように心血を注いだ。だからこそ、ムハンマドジャーは10歳の時にクルアーンのハーフィズになるに至った。当初はコーカンドとブハラのマドラサで、のちにはアフガニスタンのバルフとマザリー・シャリーフといった町で知の習得に励んだ。その後、師匠たちの勧めによってインドへ旅立ち、アジュメール市のウスマーニーヤ・マドラサでさらに8年間にわたり知を習得した。このことにちなんで、彼は「ヒンドゥスターニー」〔インド出身者の謂い〕という異名を得た。ムハンマドジャー・ヒンドゥスターニー・ダームッラー——彼に神の慈悲あれ——は、1989年に97歳のお歳で他界し、マウラーナー・ヤアクーブ・チャルヒー廟に埋葬された。

ハージー・ダームッラー——彼に神の慈悲あれ——は、何十、何百もの弟子たちを教育し、故郷への奉仕に備えさせ、故郷に知識と宗教信仰の光を広めると同時に、将来の子孫たちに大きな知的財産も残した。この人物は、タジキスタン科学アカデミー東洋学研究所写本部門で翻訳者として働いていた頃に、一連のアラビア語書籍をペルシア語とウズベク語に翻訳した。ザマフシャリーの著作『箴言撰集』と〔通称〕『ザマフシャリーのマカーマート』をアラビア語からペルシア語に、イマーム・バルザンジーの著作『マウリド』をウズベク語に、ブーサーリー⁽³⁸⁾の『ブルダの頌詩』をペルシア語に、アラブの詩人ファラズダクがイマーム・ザイヌルアービディーン⁽³⁹⁾に捧げた頌詩をウズベク語に翻訳した。その後、イマーム・ブハー

(37) 書名冒頭の“Bayonulfurqon”というアラビア語式の語句は、ウズベク語原文で与えられている“farqlovchi bayon”という訳にしたがって「弁別的説述」と訳した。ただし“furqon (furqān)”の語は元来アラビア語で「証拠」を意味し、定冠詞をともなった“al-furqān”はクルアーンそれ自体を指すことから、件の語句は「証拠(たる聖典)の説述」と訳すこともできる。書名全体は形態的にみると、前置詞“fi (fi)”を挟んで、“-furqon (-furqān)”と“-qur'on (-qur'ān)”の両句末が押韻するかたちをとっている。

(38) エジプトのブーサーール村出身の詩人(1211～94年)。本名はムハンマド・イブン・サイード、尊称はシャラフッディーン。頌詩(カスィーダ)を得意とした。代表作『ブルダの頌詩』の「ブルダ」とは、預言者ムハンマドの外套を指す。

(39) マディーナ出身の12イマーム派第4代イマーム(658～712/13年)。預言者ムハンマドの曾孫である。

リーの『真正集』、ブルハースッディーン・マルギーナーニー⁽⁴⁰⁾の著作『ヒダーヤ』、アブー・ハニーファ― 彼に神の慈悲あれ―の『大フィクフ』、アブドゥッラフマーン・ジャーミー⁽⁴¹⁾の〔通称〕『ムッラーの注釈』、ムハンマド・ハイラーバーディー⁽⁴²⁾の著作『論理の階梯』などといった諸著作に注釈をおこなった。〔通称〕『シャーシー⁽⁴³⁾のウスール』や〔ムッラー・ジーワン⁽⁴⁴⁾の〕『光輝のなかの光輝』、〔タフターザーニー⁽⁴⁵⁾の〕『修辞学小注釈』といった諸著作をウズベク語とペルシア語に翻訳した。また、アブドゥルカーディル・ビーディル⁽⁴⁶⁾の抒情詩に注釈をおこなった。ダームッラーの代表作が聖なるクルアーンの解釈書とされることに疑いの余地はない。

著作について

著作の題目は『バヤーン・アルフルカーン・フィー・タルジマト・アルクルアーン』、すなわち『クルアーンの翻訳における弁別的説述』である。これは、著者が亡くなる10年ほど前〔1979年頃〕に著された⁽⁴⁷⁾。弟子たちが言い伝えるところによれば、著者― 彼に神の慈悲あれ―は、この解釈書の執筆について、とりわけ以下のようにおっしゃった。「アラビア語とペルシア語による解釈書はとて多く記されているが、ウズベク語による解釈書はほとんどない。それゆえ、この大なる仕事を全力で成し遂げる決心をした。多くの人にとって理解しやすいよう、この解釈書をアンディジャン方言で記すことにする。至らぬ点があれば、敬愛する読者諸賢からの批正を望んでやまない」。

(40) リシュタン出身のハナフィー派法学者(1152～97年)。

(41) ホラーサーン地方ヘラート近郊の町ジャーム出身のスーフィーならびに詩人(1414～92年)。クルアーン学やハディース学、法学にも造詣が深かった。スーフィーとしてはナクシュバンディー教団のサアドゥッディーン・カーシュガリーに師事し、また後年にはヘラートで同教団のピール(導師)として活躍したことで知られる。

(42) インドのハイラーバード出身のハナフィー・マートゥリーディー派学者(1828/29年没)。ファズリ・イマームの名で有名。その主著『論理の階梯』は、マドラサで論理学の教科書として使用された。

(43) タシュケント出身のシャーフィー派法学者、カッフール・シャーシー(904～76年)を指す。シャーシーはイスラーム法の法源(ウスール)学の分野ですぐれた業績を残した。

(44) インドのラクナウ出身のハナフィー派法学者(1717/18年没)。本名はアフマドで、シャイフ・アフマドの名でも知られる。タフスィール学とウスール学ですぐれた業績を残した。その著作『光輝のなかの光輝』はウスール学の注釈書である。

(45) ホラーサーン地方ナサー近郊のタフターザーン出身の修辞学者(1322～89/90年)。論理学、神学、タフスィール学などの分野でもすぐれた業績を残した。アミール・ティムールによってサマルカンドの宮廷に招かれ、そこで一生涯にわたって暮らした。

(46) インド東北部のアズィーマーバード(パトナ)出身のスーフィーならびに詩人(1644～1721年)。父祖はケシュ(シャフリサブズ)出身である。

(47) この解釈書は、1979年頃以降のウズベキスタンの解釈書読者層のあいだで密かに流布され、『アルトゥンハン・トラの解釈書』をしのぐ最も権威あるものと評されるようになった。

この解釈書は口語的、すなわち口述による解釈書であったがゆえに、独自の構成と文体、特別な精神性をもっている。だからであろうか、この著作では、多くのアーヤの翻訳が逐語的になっておらず、解釈が順不同になされている。アーヤの一部の解釈は、あるべき翻訳より前になる。また、いくつかのアーヤは〔通例とは〕やや異なったかたちで翻訳されている。当時の慣例にしたがって、翻訳において補足された言葉が明示されていない。さらに、そこで引用されている情報には多くの場合に典拠が示されておらず、それはむしろ伝承のかたちで語られている。〔しかし、〕この著作は、今日においてなおその価値を失っていない。

著作の稿本と刊本について

ハージー・ヒンドゥスターニー・ダームツラー——彼に神の慈悲あれ——は、晩年に聖なるクルアーンに解釈をおこなうべく決心し、この仕事をおよそ1年で成し遂げられた。彼はこの著作を書き取らせ（すなわち口述し）、それを弟子たちが〔アラビア文字〕テュルク語アルファベットで著した。とりわけ、この著作を書き起こすさい、マルギラン人の故アサドゥッラーハン・ダームツラーとコーカンド人のイブラーヒームジャーニ・ダームツラーが筆記をおこなった。その後、1983～84年にアンディジャン人の篤信家であり、またハージー・ヒンドゥスターニー・ダームツラーの信奉者の1人でもある義子の故アーキフハン・ハージー・ダダのイニシアティブのもと、アブドゥッラッザークというナマンガン人の書家によって、この解釈書は元々のアルファベットにもとづき6巻に分けて書き写され、配布された。また彼は、この著作の一部を書き写し、販売もした。こうして、この解釈書は当時からすでに一部の人々の手元に行き渡っていた。アブドゥッラッザークの書写にさいしては、内容的に相互にきわめて関連したいくつかのアーヤの本文が記され、その下にアーヤの翻訳と解釈がほどこされるかたちをとった。

この著作は、ウズベキスタン科学アカデミー〔言語・文学研究所〕の研究員であり勤勉な学者サイフィッディーン・ラフィーッディーノフによって、2006年にいくらかの増補と注釈とともにキリル文字での刊行準備がなされ、マーワラーアンナフル出版社から刊行された。

『聖なるクルアーン：ウズベク語注解付き翻訳書』〔*Qur'oni karim. O'zbekcha izohli tarjima*〕

著者について

シャイフ・アラウッディーン・マンスールは、有名なウズベク人ウラマー〔イスラーム諸学を修めた知識人〕の1人である。彼は、1952年にクルグズスタン共和国オシュ州カラスー市で生まれた。彼は当代の著名な学者たちから教育を受け、知識を完成の域に到達させた。この学者は聖なるクルアーンの意味のウズベク語訳注を準備するという大いなる務めを果た

し、榮譽を得た。また彼の翻訳書は、中央アジア・カザフスタン・ムスリム宗務局が開催したコンクールで最優秀と評価された。その後、彼は2000年にカラス市で聖なるクルアーン学習センターを組織し、聖なるクルアーンの意味をロシア語（アリーシェール・アフマドと共訳）とクルグズ語に翻訳した。後年には、聖なるクルアーンのできるだけ包括的な解釈書を準備すべく取り組んでいる。この学者はまた、『イマーム・アアザム⁽⁴⁸⁾は偉大なるわれらのイマームなり』と題する著作もものした。

著作について

この著作は、初版では『聖なるクルアーン：ウズベク語注解付き翻訳書』と名づけられた。このことについて、ラフマトゥッラー・カーリー・アービドフ⁽⁴⁹⁾は以下のように記している。「この著作の欠陥は、著者が絶対であるはずの『聖なるクルアーン』という題目を翻訳書に付してしまっているという過ちである。なぜなら、聖なるクルアーンはアラブの言語とアルファベットで書かれたからである」（『中央アジアの学者たちの解釈学分野における功績』タシュケント・イスラーム大学出版局、2009年）。

この翻訳書は、聖なるクルアーンの意味がウズベク語で書かれた最初のものとなされている。このことが著者にとって大きな榮譽と成果であることに疑いはない。そこでは、クルアーンのアラビア語本文は記されていない。スーラの名称とアーヤの数を記すにとどまっている。〔項目として立てられた〕各スーラの冒頭でそのスーラについて概説がなされ、ただ必要に応じてのみアーヤが注釈されている。この翻訳書は初の試みであったので、初版において一部の欠陥はあったが、それは後続の版で解決されていった。

著作の刊本について

70年間におよぶ抑圧体制が崩壊し、宗教への道がひらかれはじめ、また独立によって活みなぎるそよ風が吹きはじめた頃、〔発行部数の規模の大きさの点で〕民衆にはじめて供されたクルアーンの意味の翻訳が、アラーウッディーン・マンスール・ダームツラーによって準備された聖なるクルアーンのウズベク語注解付き翻訳書であった。それは1990年、月刊誌『東方の星』の第3号から購読者の関心のもとに委ねられた。これは初の試みであった

⁽⁴⁸⁾ 「イマーム・アアザム」（「至大なる導師」の意）はハナフィー法学派の祖、アブー・ハニーファ（699頃～767年）の尊称。統語関係からもわかるように、これはアラビア語／ペルシア語からウズベク語に借用された表現である。

⁽⁴⁹⁾ ナマンガン出身のクルアーン学者（1951年～現在）。14歳でクルアーンすべてのスーラを暗唱し、1973～78年にはブハラ市のミーリ・アラブ・マドラサでイスラーム諸学を学んだ。独立後、タシュケント・イスラーム大学で准教授として働いたのち、タシュケント市内の政府公認モスクでイマーム（礼拝の先導者）職を務めるに至った。現在は病氣療養のため一線から退いている。

ことから、まず聖なるクルアーンとアラビア語、宗教史に通じている専門家と著述家から構成される特別な編集委員会の管理下で刊行された。同誌の発行部数は17万部であった。翻訳書は多くの補訂を経て完成され、1992～93年頃にチョルパン出版社およびガフル・グラーム出版社から一度ならず再版された。著者の主張によれば、この翻訳書の印刷数(発行部数)の総計は200万部に達した。この著作は、1995年にウズベク語からトルクメン語に翻訳され、トルクメニスタンでは1万部が印刷された。2001年には、ビシュケク市でラテン文字表記のカザフ語版が刊行された。

翻訳者は、この翻訳書にもとづいて『偉大なるクルアーンの解釈書』と題するウズベク語の解釈書にも着手した。その第1巻は開扉章と牝牛章の解釈に当てられており、これは2013年にビシュケクで刊行された。現在では、この解釈書の第7巻までが刊行されており、それらの巻では聖なるクルアーンのおよそ半分以上がウズベク語に翻訳され、また解釈されている。

『新月の解釈書』〔*Tafsiri hilol*〕

著者について

シャイフ・ムハンマド＝サーディク・ムハンマド＝ユースフ——彼に神の慈悲あれ——は、1952年4月15日にウズベキスタン共和国アンディジャン州に生まれた。中等学校を卒業後、ブハラ市のミーリ・アラブ・マドラサに入学する。のちに、彼はタシュケントのイマーム・ブハーリー名称イスラーム高等学院で学業を継続させる。高等学院を卒業すると、『ソヴィエト東方のムスリム』誌で働く。その後、リビア・アラブ合衆国トリポリ市のイスラーム・ダアワ大学⁽⁵⁰⁾に入学し、同学を1980年に優秀な成績で終え、帰郷した。その後、中央アジア・カザフスタン・ムスリム宗務局外事課で働き、またちょうどその時に〔イスラーム〕高等学院で講義を担当しはじめる。それから、同学院で副院長となり、のちには学院長職に就いた。1989年に開催された宗務局の総会において、中央アジア・カザフスタン・ムスリム宗務局のムフティー職に任命される。彼は独立後のウズベキスタン共和国の初代ムフティーになった。

シャイフ・ムハンマド＝サーディク・ムハンマド＝ユースフ殿下は、後年には学問・教育や宗教文化の向上のために比類なき貢献を果たした。彼は複数の国際機関のメンバーであった。

⁽⁵⁰⁾ アラビア語の原語は「ジャマーイーヤ・ダアワ・イスラミーヤ」(イスラーム宣教機関)である。この機関はカッターフィーの思想を広めることを目的として設立されたと言われる。これらの点について、日本エネルギー経済研究所中東研究センター研究員であるリビア研究者・小林周氏にご教示いただいた。

- ▶ 栄光あるマッカのイスラーム世界連盟の創設会議のメンバー。
- ▶ 世界イスラーム諸民族指導機構事務総局のメンバー。
- ▶ 世界ダアワ連盟のメンバー。
- ▶ 世界ウラマー会議のメンバー。
- ▶ イスラマーバード市における世界イスラーム連盟のメンバー。
- ▶ 世界ウラマー・思想家フォーラム執行委員会のメンバー。
- ▶ 世界モスク最高評議会のメンバー。
- ▶ ヨルダンにおけるアール・バイト機構附属イスラーム思想学会のメンバー。

シャイフ猥下は、エジプト・アラブ共和国やリビア合衆国、ロシア連邦のような国々において、名誉称号や勲章をもって表彰されている。

シャイフ・ムハンマド＝サーディク・ムハンマド＝ユースフ猥下は、何十ものひじょうに貴重な著作を著している。それらは、『信仰』、『中庸：人生の道』、『宗教は教導なり』、『イスラームにおける人権』、『スンナ派の教義』、『靈魂の躰け』(3巻)、『キファーヤ：ウィカーヤ提要への注釈』(3巻)、『礼節の宝庫』(〔ブハーリーの〕著作『アルアダブ・アルムフラド』の訳注・4巻)⁽⁵¹⁾、ハディースの注釈にあてた『ハディースと人生』(39巻)等である。彼の代表作が聖なるクルアーンの解釈にあてた『新月の解釈書』であることに疑いの余地はない。

著作について

この著作は、抑圧体制が終焉し、われらの民衆がみずからの宗教に回帰しはじめた頃、ほかに先駆けて著わされた解釈書であったので、闇夜を照らす新月にちなんで『新月の解釈書』と名づけられた。『新月の解釈書』は、ウズベク語を用いる人々が最も愛読した解釈書の1つである。それどころか、今日の読書家たちは「解釈書」と言えば、この書のことだと理解するようになりさえした。それは至極当然のことであり、同書はそうなるべくしてなったのである。

この著作におけるアーヤの翻訳では伝統的な文体も使われ、それゆえクルアーンに固有の壮麗さが光り輝いている。各スーラの釈義に入る前に、その名称、マッカ啓示またはマディーナ啓示の別、およびアーヤの数が述べられ、そのうえで当該スーラの主題について略解が示される。それぞれのアーヤに番号をつけ、まずアラビア文字テキスト、次に聖なるアーヤの意味の翻訳が示され、さらにアーヤの解釈へと移る。翻訳ではアーヤの意味の普遍性が保持されている。アーヤの意味の翻訳は太字で書かれている。意味の理解に資するが原文にはな

⁽⁵¹⁾ 『礼節の宝庫』は、イマーム・ブハーリーの編纂になる礼儀に特化したハディース集である。

い言葉は、通常の文字で書かれ、括弧で括られている。異なるアーヤどうしの内容的な相互関連性も明らかにされている。一部のアーヤの啓示の理由について伝承がある場合には、それらが引用されている。必要な場合には、歴史的な出来事と物語も記されている。一部の人々と部族についての概要も紹介されている。

この解釈書の最も重要な点と価値は、それが真正で信頼に足る情報にのみ依拠し、かつ引用されたハディースとほかの文献の出典を記していることにある。アーヤの内容を今日の状況に関連づけて説明していることには、わけても大きな意義がある。同書の「『新月の解釈書』の読者へ」と題される序文や、おなじくその後続の版の序文においては、聖なるクルアーンの歴史と解釈学、およびタフスィール学者たちについて、ひじょうに貴重な情報が提示されている。

総括すれば、この著作には独特の高邁な精神、誠実さと愛の光が輝いている。それが神聖なる土地において気高き心に生まれでた⁽⁵²⁾ことは、慧眼の読者の誰もがただちにこれを察するのである。それは、テュルク語とウズベク語でなされた解釈書の花冠である。この著作では、伝統性と現代的なまなざしが一体化している。アーヤは流れるような滑らかさをもって、じつに幅広く説明されているがゆえ、これに類するものを見つけることはひじょうに困難である。このわれらのタフスィール学者がアーヤのなかに見いだす意味は、他所ではけっして見られないものなのである。

著作の刊本について

『新月の解釈書』の初版は、1991年に聖なるクルアーンの30番目のジュズウの解釈書から刊行されはじめた。その後、29、28、27番目のジュズウの解釈書が順に読者たちの手元に届くことになった。それから著者は、26番目のジュズウの解釈書をはじめて外国で上梓した。のちに、牝牛章、イムラーン家章と女章の解釈書が別々に単行本として刊行された。このようにして、聖なるクルアーンの現代ウズベク語によるはじめての完全な解釈書が出現したのである。著者が帰郷したのちの2006年に⁽⁵³⁾、『新月の解釈書』は全6巻本として刊行された。2008年にはこの解釈書に増補がなされた第2版が、また2013年には第3版が刊行された。それ以降も、解釈書はほぼ毎年再版され、読者たちによって前払いで購入されている。この解釈書とは別に、アーヤの意味の翻訳のみが取りだされ、単行本として刊行されている。

(52) この書がムハンマド＝サーディク・ムハンマド＝ユースフの聖地マッカ滞在中に執筆されたことを指している。

(53) ムハンマド＝サーディク・ムハンマド＝ユースフの国外追放の経緯については、「編訳者序文」の注10で述べた。くわしくはそちらを参照されたい。

『聖なるクルアーン：翻訳と学問的・歴史的注釈』
 [Qur'oni karim: Tarjima va ilmiy-tarixiy izohlar]

翻訳者

①第1～3章の翻訳者

哲学博士・東洋学者であるムタッリブ・ウスマーン〔ウスマーノフ〕・アフメドヴィチ。序文と学問的・歴史的な注釈も彼による。ムタッリブ・ウスマーンは、1924年12月10日にアンディジャン州イズバスカン郡パイトゥク村で生まれた。彼は、1947～52年に国立中央アジア大学〔現在のウズベキスタン国民大学（以下同）〕東洋学部において〔ソ連〕国外の東洋諸国の歴史に関して教育を受ける。1957～61年には、モスクワの社会科学系の大学院で学業に励む。彼は一連の学問的・実践的諸課題の遂行において功があった。とりわけ1984年から1987年まで、ウズベキスタン科学アカデミー哲学・法学研究所において無神論部門長であった。ムタッリブ・ウスマーンは、1987年からウズベキスタン科学アカデミーのアブー・ライハーン・ビールーニー名称東洋学研究所に移籍し、そこでクルアーン翻訳班長やイスラーム学部門長、また主幹研究員として勤務する。ムタッリブ・ウスマーンは、数々の国際学術会議に参加し、講演をおこなった。彼の編纂になる『イスラーム便覧』は何回も刊行された。宗教やイスラーム史、また哲学に関する多くの論文と小冊子が発表されている。彼は1994年12月にウズベキスタン共和国栄誉賞の表彰を受け、同年の12月18日に他界した。

②第4～9章の翻訳者

言語学準博士のアブドゥサーディク・イリソフ。1928年2月20日にタシュケントで生まれた。1946～51年、国立中央アジア大学東洋学部の〔ソ連〕国外東洋諸国史部門で学んだ。1952～62年には『ゲンチャ』誌で責任秘書や編集長として勤務した。1960年からはウズベキスタン共和国科学アカデミーのアブー・ライハーン・ビールーニー名称東洋学研究所において、当初は下級研究員、のちに上級研究員として職務を遂行した。イブン・スィーナーの『サラマーンとイブサール』の物語を主題として準博士号の学位を取得した。国際会議において数々の主題で講演をおこなった。彼は、研究活動をおこなっていた期間に50点以上の書物と小冊子を著した。300点以上の一般向けの学術的論考が刊行された。

③第10～16章の翻訳者

言語学博士のハージー・イスマトウッラー・アブドゥウッラーエフ教授。1927年にナマンガン市で生まれた。東洋学者・史学者・文学者。国立中央アジア大学で教育を受けた。サンクト・ペテルブルグ大学〔旧レニングラード大学〕で大学院生として学んだ。1993年からは国立ナマンガン大学で東洋諸語講座長。写本と石版本史料にもとづいて、20点以上の書物を刊行した。

④第17章の翻訳者

言語学準博士のウバイドゥッラー・ウヴァトフ教授。1940年にカシュカダルヤ州グザル郡で生まれた。1958～64年、国立タシュケント大学〔国立中央アジア大学の後身、現在のウズベキスタン国民大学〕で学んだ。国立タシュケント大学アラビア語教員、ウズベキスタン共和国科学アカデミー東洋学研究所主幹研究員、イマーム・ブハーリー国際センター長といった職位で勤務した。アラブ諸国において通訳者を務めた。多数の学術論文の著者。2008～13年には、イマーム・ブハーリー国際センター長の任にあった。

著作について

著作の題目は、『聖なるクルアーンの意味の翻訳と学問的・歴史的注釈』と名づけたほうがわれわれの考えではより十全で正確なものとなる。この翻訳書は、ムタッリブ・ウスマーンが指導する東洋学者たちによって編纂されたものであるが、完全ではない。同書では聖なるクルアーンの半分、すなわち開扉章からはじまり、夜の旅章までの翻訳と注釈がなされた。責任編集者であるムタッリブ・ウスマーンは、翻訳に入る前に、文字と文献史料、イスラームとクルアーンの歴史、そしてアッラーの使徒——彼に祝福と平安あれ——の行状について簡潔かつ貴重な情報を提供する。著者はこの序文の冒頭で、主題に公平な立場からアプローチするつもりであること、西洋やロシアの東洋学者たちの論著のみならず原典史料やムスリムの歴史書にも依拠すること、また一部の東洋学者によって現今までなされてきた多くの研究が一面的にしてもっぱら無神論の精神の影響下にあることを強調する。したがって、著者が与える情報はムスリムの学者たちの言葉にほぼ調和する。しかるべき箇所において、一部の西洋の東洋学者の根拠のない偏った考えは、確固たる証拠によって批判に晒される。

この刊本では、頁の真ん中にマディーナのムスハフ〔書物の形態をとるクルアーン〕にもとづいた聖なるクルアーンのアラビア語本文が記され、各頁ではアーヤの意味の翻訳が本文の周囲に太字で示されている。監訳者であるムタッリブ・ウスマーン自身が強調しているように、翻訳は純学問的な基準に沿うものである。したがって、同書においてアーヤはほぼ逐語的に翻訳され、また一部の補足説明も本文中に挿入されるべきことがわかるように配慮されている。だからこそ、翻訳には括弧が1つも使われていない。補足的な注釈もなされている。補足的な注釈は参照欄に示されている。一部の箇所では、ある文言の訳語の選択理由を明示する努力もなされている。一部の東洋学者が「スーラ」や「アーヤ」といった言葉をも翻訳しようとするのは間違いであり、根拠を欠くことが説述される。注釈においては、ウズベク語によるほかの解釈書や注解とは異なるかたちで、歴史上の人物や出来事について現代歴史学の観点からもアプローチし、歴史史料の読解から得られる情報も引用されている。翻訳作業の完成度は相当なものであるとはいえ、初の試みであったことから、そこには議論すべき点

もある。たとえば、戦利品章第27節の意味の翻訳において、「使徒」(Rasul)という言葉が「大使」(elchi)と訳されていることは、読者が意味を誤解する原因となっている。

著作の刊本について

この著作の一般向けの刊本はない。その特別の刊本は2004年12月、監訳者兼責任編者であった故ムタッリブ・ウスマーン生誕80周年祭を前に、科学出版所から発行された。同書は、ウズベキスタン共和国科学アカデミー・アプー・ライハーン・ビールーニー名称東洋学研究所における研究会議の、2004年9月22日に開催された第8回定例会議の決定により、同研究所を出版者として刊行された。

『聖なるクルアーンの意味の翻訳と解釈』 [*Qur'oni karim ma'nolarining tarjima va tafsiri*]

翻訳者について

シャイフ・アブドゥルアズィーズ・マンスーロフは、有名なウズベク人ウラマーの1人である。1944年にフェルガナ州ミンダン村で生まれた。同時代の幾人かの著名なウラマーや学識者たちの手ほどきにより教養を身につけた。1975～79年にはイマーム・ブハーリー名称タシュケント・イスラーム学院で、また1980～81年にはスーダンのウンム・ドゥルマーン大学で教育を受けた。その後、ウズベキスタン・ムスリム宗務局のモスク・ファトワー部門長、マワラーアンナフル出版所長、閣僚会議附属宗教問題委員会の一部門長、ウズベキスタン共和国の大統領諮問役、タシュケント・イスラーム大学の副学部長といった役職で勤務した。彼には、聖なるクルアーンの意味のウズベク語訳以外に、『徳業に関するハディース』、『ムスリムたることの初歩的な教訓』、『ハッジの儀礼規則』、『1001のファトワー』、『イスラームは麻薬に反対する』といった、いくつかの著作がある。同様に、『1001のハディース』、〔シャブラーウィー⁽⁵⁴⁾の〕『説述の標示』、〔ザマフシャリーの〕『金の首飾り』といった著作をアラビア語からウズベク語に翻訳した。2006年8月からウズベキスタン・ムスリム宗務局長補佐の職にある。

著作について

この著作は『聖なるクルアーンの意味の翻訳と解釈』と題されている。そこでは、マディーナ版ムスハフに依拠しながら、見開き頁の中央寄りに聖なるクルアーン本文が配置され、その周りにアーヤの意味の翻訳が示されている。この翻訳の特徴の1つは、意味をより理解

⁽⁵⁴⁾ カイロ出身のシャーフィイー派法学者(1679～1757年)。本名はアブドゥッラー・イブン・ムハンマド。その著作『説述の標示』は格言や逸話を集めたもの。

しやすくするために、解釈内容の提示にあたって本文にはない言葉を多く使用していること、ならびにこれらの語句が括弧に入れられていることである。一部のアーヤの内容を説明するために、脚注もほどこされている。巻末にはクルアーンと読誦学の知識に関する一連の重要な情報が補足されている。

著作の刊本について

この著作は1巻本であり、2001年と2004年、2007年、2009年の4度にわたって出版された。このように版を重ねていくなかで、いくつかの修正と補足がほどこされた。古いほうの版ではクルアーンの本文と〔解釈文の位置がうまく〕対応しないかたちで頁組みがなされた一方、新しいほうの版ではうまく対応するかたちで印刷がなされている。

『叢知の解釈書』〔Tafsiri irfon〕

著者について

ウスマーン・アリーモフは、著名な宗教家であり、ムフティーである。1950年にサマルカンド州イシュティハン郡で生まれた。1983～87年にはイマーム・ブハーリー名称タシュケント・イスラーム学院で教育を受けた。長年にわたって、サマルカンド州のイマーム・ブハーリー集会モスクにおいてイマーム・ハティーブとして勤務した。2000年以降には、ウズベキスタン・ムスリム宗務局サマルカンド州代表の身分で活動した。2006年8月からはウズベキスタン・ムスリム宗務局長、すなわちムフティーである。彼には『ハディース学者たちのスルターン』、『イマーム・アルブハーリーの祝福』、『ハズラト・イマーム⁽⁵⁵⁾全集』、『子供の躰け』などの著作がある。

著作について

この解釈書では、スーラの名称についての説明とそこで焦点が当てられている主題についての概要が示されている。アーヤのアラビア語本文の下にウズベク語訳が太字で付され、そのあとで解釈に移る。アーヤは、多くの箇所では別のアーヤの内容と照らし合わせながら解釈されている。引用された情報については原典が提示されており、信頼に足る諸著作が出典となっている。スーラの美質について伝えられてきた情報がある場合、それはスーラのあとに

(55) 「ハズラト・イマーム (Hazrat Imom)」(「導師陛下」の意) はタシュケント出身の法学者、カフファール・シャヤーシー(前出)の尊称。これは現代ウズベク語の口語では、「ハスティマーム (Hastimom)」というくずれた縮減形で言及されることも少なくない。タシュケントの旧市街には彼の名を冠した建築複合体が残っている。その敷地と遺構はウズベキスタン独立後、大規模な復旧・整備事業の対象とされた。

補足されている。

著作の刊本について

『叡知の解釈書』は、2012年から出版されはじめた。はじめに、第30ジュズウと第29ジュズウの解釈書が出版された。その後、聖なるクルアーンの冒頭、すなわち開扉章から解釈がなされはじめた。この著作の2015年における最近の巻では、第11～13ジュズウ、すなわちフード章とユースフ章の解釈がなされている。

結論に代えて

本論を締めくくるにあたり、次のことを強調しておいてよからう。ここまで言及されてきたウズベク語による翻訳書や解釈書のほかに、一部のスーラやジュズウに限定されたテュルク語あるいはウズベク語による翻訳書や解釈書、さらには他言語からテュルク語に訳された解釈書もある。とりわけヤアクーブ・チャルヒー⁽⁵⁶⁾がペルシア語で書きあげた〔通称〕『チャルヒーの解釈書』という著作には、2通りのテュルク語訳、すなわち〔翻訳者の名にちなんで〕ハマダーニー版とタシュカンディー版の翻訳書がある。同様に、〔スューティー⁽⁵⁷⁾の〕解釈書『イトカーン』もテュルク語に訳されている。東洋学者シャムスディーン・ババハノフ⁽⁵⁸⁾は、クルアーンの第30ジュズウを翻訳と注釈とともに1991年に出版している。結論づけて言えば、テュルク諸民族それぞれを代表する知識人たちは、聖なるクルアーンの意味をみずからが帰属する民族に伝達することにおいて模範的な実例を示すことに成功したのである。われわれは、以上では聖なるクルアーンのウズベク語の翻訳書と解釈書について論じたにすぎない。

広くテュルク諸語で著された翻訳書と解釈書について語る場合、その著作数が200点以上にのぼることは明らかである。このことについては一連の学術論文や研究書も著わされている。トルコ人学者アブデェルカーディル・エルドアンは、テュルク・イスラーム博物館で保管されている9点のテュルク語による解釈書と翻訳書に関して学術研究をおこない、そのうちの3点を最古のものとしみなした。准教授のイブラーヒーム・ウスマーノフとグルナーザ・

(56) ガズナ出身の著名なスーフィー（1363～1447年）。ハナフィー派法学者ならびにタフスィール学者としても活動した。スーフィーとしてはバハーウッディーン・ナクシュバンド（1318～89年）の教えを受けた。その墓廟はタジキスタンの首都ドゥシャンベの南郊に位置する。

(57) カイロ出身のタフスィール学者、ハディース学者ならびにスーフィー（1445～1505年）。シャーフィイー派法学や歴史学などの分野でもすぐれた業績を残した。

(58) タシュケント出身で、イスラーム法学者としても有名（1937～2003年）。中央アジア・カザフスタン・ムスリム宗務局の第3代ムフティー（在任1982～89年）を務めた。

サイードヴァの共著である『マーワラーアンナフルのテュルク語解釈書抄史(チャルヒーの解釈書の翻訳)』(2012年タシュケント刊)と題された著作⁽⁵⁹⁾の導入部では、テュルク語による[クルアーンの]解釈書についてかなり充実した情報が提供されている。同様に、イマーム・ブハーリー名称タシュケント・イスラーム高等学院の2013年の卒業生であるガーイボフ・マクスードジャンは、『聖なるクルアーンの意味のウズベク語による翻訳書の比較分析』と題された卒業論文において、このテーマで考察をおこない、数々の貴重な知見をもたらしている。

偉大な父祖たちがテュルク諸語のほか、アラビア語やペルシア語で著した解釈書も多数あり、それは世界的に見ても価値を有している。これらすべては、あなたとわれわれ、すなわち今日のウズベク・ムスリムにとって名誉であると同時に、大きな責任を負わせるものでもある。われわれは、聖なるクルアーンのウズベク語による翻訳書と解釈書について知見を得るとき、われらがシャイフ・ムハンマド=サーディク・ムハンマド=ユースフ——彼に神の慈悲あれ——の御高著『新月の解釈書』が、これらの書物を百花にたとえるならばその花冠、また美しき首飾りにたとえるならばその珠玉たることを目のあたりにする。われらの国民が解釈書と言え、まっさきにこの著作を連想するようになったのも故なしとはせず、同書へのかかる注目は至極当然のものである。とりわけ、それがわれわれの生きる現代においてもすこぶる時宜にかなない、十全に書き上げられていることは瞠目に値する。

強調されてしかるべきは、聖なるクルアーンを他言語に翻訳し、解釈することに対する見方が時代によって変化してもきたことである。当初は全般的な許可が与えられたのではあったが、のちにこうした許可の必要性がそれほどなくなったことと一連の宗教上の目的ゆえに、クルアーンの意味を他言語に翻訳することに対して多くの学者が自分の意見を積極的に述べることはなかった。しかし、それから数世紀を経ると、ムスリムのウンマ[信仰共同体]がアラビア語から遠ざかってしまったことなどさまざまな理由から、宗教的な知識を学ぼうとする気概やそのための機会がまれになっていったことを見てとった学者たちは、聖なるクルアーンを他言語に翻訳し、解釈することに格段の関心を向けた。彼らはまた、これが宗教上の要件にして義務行為であることを強調して、特別なファトワーを発した。とりわけ他宗教の信者や無宗教者たちによるクルアーンの意味の翻訳を出版する活動が加速すると、ウラマーたちはクルアーンの本래の姿を保持し、かつその意味を人々に純粋なかたちで伝えるために、この営為を自分たち、ムスリムのウラマーが掌握すべきことを強調した。今日、聖なるクルアーンの意味のウズベク語による翻訳と解釈は、いくつかの点で重要局面を迎えている。

1) ムスリムたちはみずからの信仰の源泉に通じる必要がある。これは宗教的・社会的な

⁽⁵⁹⁾ 同書は本文中の前段で述べられた『チャルヒーの解釈書』のハマダーニー版テュルク語訳(その写本はウズベキスタン科学アカデミー東洋学研究所に稀観本として収蔵)を取りあげ、そのテキストのキリル文字翻刻を提示するとともに、これに史料学的見地から詳細な解説と注釈、および索引を付した佳編である [Usmonov va Saidova 2012]。

要件である。聖なるクルアーンは、至高なるアッラーが人類のために送ったメッセージであり、神の便りである。それを読み、理解することはすべてのムスリムの負うべき絶対的義務である。その意味を直接、すなわち神僕〔たる人間〕たちの言葉が混じり込んでいない状態で読むこともまた、独自の利益を有する。難解な箇所については、ウズベク語の解釈書がひじょうに役立つのである。法学やその他の学問をとおして聖なるクルアーンの規定を学ぶことはそれとして1つのやり方であるが、元々呼びかけとして発せられた神の言葉そのものを知ることが格別な光輝と喜び、そして知識たることは明らかである。というのは、原典はやはり原典であり、その価値はけっして減じないからである。

時折、「クルアーンはアッラーの言葉である。それを誰もが理解できるわけではない。われわれはムジュタヒド〔自身の判断にしたがってイスラーム法上の見解を示す資格・権能のある法学者〕を介してのみクルアーンを理解できる」という趣旨の見解にも遭遇することがある。この言説もある意味で妥当ではあるのだが、一般原則ではない。なぜなら、クルアーンの大部分は確定しており、つまりは意味が明白なアーヤから構成されているからである。概して、クルアーンは多くの人が理解できないような不可解で抽象的なものではない。至高なるアッラーはいくつかのアーヤでクルアーンを、「それは平明にして明白な書物である」と述べたまう。月章では数度にわたり、「たしかにわれらはクルアーンを想起する者たちのために易しいものとした」とおっしゃる。クルアーンは万人、すなわち学者と無知な者に呼びかけ、英知を授ける。1人1人の人間はその呼びかけを独自に受けとめる。一部のアーヤを理解したり、そこから法規定を引いたりするさい、学者たちの言葉を傾聴することは別の問題であり、それは〔クルアーンの翻訳書や解釈書の〕読み手の水準によってさまざまな経過をたどる。

2) 聖なるクルアーンの名を聞いたならば、ムスリムたる者ただちにみずからを正し、心底から敬意を示すのは当然である。したがって、ムスリムに影響をおよぼそうとする者たちは、かならずこの方面からやってくる。今日の過激化し、道を誤った集団や急進派の主要な武器の1つもまた、聖なるクルアーンのアーヤをみずからの見解にしたがって解釈することにあることは公然の事実である。これを未然に防ぎ、また処置するための唯一の効果的な道は、スンナ派信仰にしたがって本来の姿どおりのクルアーンの解釈を提供することである。これは古くから経験済みの正当な方法である。たとえば、イマーム・マートゥリーディー⁽⁶⁰⁾とイマーム・ナサフィー⁽⁶¹⁾らはみずからの解釈書をまさにこの目的に沿わせた。

同様に、ハナフィー派に対するさまざまな譴責に答え、かつ特定の法学派への不帰属を予防するためにも、ハナフィー派〔の立場〕に則ってなされた、法規定たるアーヤの解釈がひじょ

⁽⁶⁰⁾ サマルカンド生まれの神学者 (873 以前～944 年頃)。スンナ派 2 大神学派の 1 つであるマートゥリーディー派の創始者である。

⁽⁶¹⁾ ナサフ(カルシ)生まれのタフスィール学者、ハナフィー派法学者ならびに神学者 (?～1310 年)。

うに重要である⁽⁶²⁾。通常、宗教的な主題においては、最初に与えられた情報が人の心に特別な価値を有し、意識のなかで確固として定着してしまう⁽⁶³⁾。その情報が正しければまさしく目的にかなうが、正しくなければそれを修正することはきわめて困難である。とりわけ、みずからその考え方を正当であると固く信じて、何らかの活動をおこなったあとでは、その不当性を克服することは至難の業であり、人の死より深刻なものとみなされさえしかねない。したがって、はじめに与えられる情報が混じり気のないものたることを保証することがめざされねばならない。

3) クルアーンを一律の方法で、学問的かつ穏健な立場から翻訳し、解釈することは、社会平和とムスリムの結束、またその諸目的の統一に寄与するだろう。一部の人々は、聖なるクルアーンと高貴なるハディースの翻訳書がさまざまな集団にとって武器になる、と考える。本来はと言えば、翻訳書は集団間の諍いとは関係がない。なぜなら、こうした翻訳書がなかった場所と時代においても、そのような党派はあったし、今もあるからである。さらに、これまで出現してきたムウタズィラ派やハワーリジュ派、シーア派、また他の何十もの集団や今日の党派は、いかなる〔クルアーンとハディースの〕翻訳書も使わずして、むしろ原テキストから自分の見解にしたがって意味を抽出したすえに、道を誤ったのである。それゆえ、翻訳と解釈が一律の方法で提供されることは、集団間の諍いではなく、それとは逆に団結や見解の調和を原因づけるものと断言できる。

クルアーンとハディースが翻訳されると、人々はみずから勝手に法規定を引き出すという疑念は、恐慌以外の何ものでもない。なぜなら、一般読者がアーヤから法規定を引き出すことなどけっしてできないからである。また彼らは、アーヤとハディースをかるうじて理解するのがせいぜいであって、そこから法規定を引き出すなどありうべくもない。さらに、今日ではアーヤとハディースの翻訳や注釈にさいしては、このことをめぐる諸法学派の見解、とりわけわれらの祖国において法運用を担ってきたハナフィー派の結論が提示されている。そもそも、このような相対立する箇所は数えるほどであり、それらもしかるべきところで注記

⁽⁶²⁾ このようにハナフィー派をとくに重視する姿勢は、ウズベキスタンひいては中央アジアで同派が果たしてきた歴史的役割にも立脚すると言えるだろう。この点にかかわる研究として、たとえば、9～15世紀頃の中央アジアにおけるハナフィー法学派の発展の概要は、ムーミノフの研究書〔Muminov 2015〕からこれをうかがい知ることができる。

⁽⁶³⁾ こうした記述の背景には、著者のハサンハン・カーリーがイスラーム諸学において師と仰ぐムハンマド＝サーディク・ムハンマド＝ユースフの思想の影響を端的に見てとることができる。ムハンマド＝サーディク・ムハンマド＝ユースフとは、彼が生前に精神的な師として公言してやまなかったシリアのハナフィー派法学者ラマダーン・ブーティーから大きな思想的影響を受けている。彼の監修のもと、2013年にラマダーン・ブーティーのウズベク語による翻訳書『法学派に帰属しないことはイスラーム法を脅かす最も危険なビデオである』〔Ramazon Butiy 2013〕が刊行されたことは、その1つの証左である。この書籍は2018年にも再版された。このことはまた、サラフィー主義に批判的で体制順応的なラマダーン・ブーティーの思想がウズベキスタン政府によっても肯定的に受け入れられていることを物語るものであるだろう。

されている。このことはそれ自体としてハナフィー派の強化にも役立っている。そのため、上記の危惧が入り込む余地はまったくない。それと同時に、反対したがる人間は、粗を見つけては反対しつづける。しかし、そのような1人や2人のろくでもない徒輩のために、すべての人にクルアーンとハディースを禁ずることなどできない。幸福な時代においてすら、そのような者たちは、皆無ではなかった。しかし、彼らのために他の人々に学問を禁じるようなことを誰もおこなわなかった。

至高なるアッラーよ、御自身の言葉である聖なるクルアーンにわれら国民から生まれでた愛すべき者たちによってなされた務めを御自身の宮廷で受け入れ、彼らのうちの逝去した者たちに慈悲をたれ、現世に生き残る者たちに平安を与えたまえ。われわれ若き世代がかの偉人たちの歩んだ道から外れることなく、彼らの豊かな遺産を正しく、有効に活用していけるよう定めたまえ。

付記：本稿は、平成30年度科学研究費補助金・若手研究18K12604の助成を受けておこなった研究会での成果の一部である。また訳注の一部は、平成30年度科学研究費補助金・基盤研究(C)16K03073による研究成果を含む。

参考文献

日本語

井筒俊彦訳 1957『コーラン(上)』(岩波文庫)、東京：岩波書店。

大塚和夫・小杉泰・小松久男・東長靖・羽田正・山内昌之編 2002『岩波イスラーム辞典』東京：岩波書店。

小松久男・梅村坦・宇山智彦・帯谷知可・堀川徹編 2005『中央ユーラシアを知る事典』東京：平凡社。

ウズベク語

Barzanjij, Sayyid Ja'far ibn Hasan (Hasanxon Yahyo Abdulmajid [tarjima va sharh muallifi]). 2015. *Mavlid*, Toshkent: «HILOL-NASHR» nashriyoti. [『マウリド』]

Mahmudov, Qozoqboy (tuzuvchi). 2000. *Turkiy tafsir (XII-XIII asr)*, Toshkent: Toshkent davlat sharqshunoslik instituti. [『テュルク語解釈書(12～13世紀)』]

Mansur, Abdulaziz (tahriri ostsida). 2017. *Islom. Entsiklopediya*, Toshkent: «O'zbekiston milliy entsiklopediyasi» Davlat ilmiy nashriyoti. [『イスラーム百科事典』]

Ramazon Butiy, Muhammad Said (Muhammad Sodiq Muhammad Yusuf umumiy tahriri ostida).

2013. *Mazhabizlik Islom shariatiga tahdid soluvchi eng xatarli bid'atdir*, Toshkent: «HILOL-NASHR» nashriyoti. [『法学派に帰属しないことはイスラーム法を脅かす最も危険なビドアである』]

Usmonov, Ibrohimjon va Gulnoza Saidova (so'zboshi, tabdil, izoh va mavzu ko'rsatkichlari mualliflari). 2012. *Movarovnahr turkiy tafsilari tarixidan (Tarjima-i tafsir-i Charxiy)*, Toshkent: «Movarovnahr» nashriyoti. [『マーワラーアンナフルのテュルク語解釈書抄史(チャルヒーの解釈書の翻訳)』]

アラビア語・テュルク語

al-Ṭarāzī al-Madanī, al-Sayyid Maḥmūd b. al-Sayyid Naḍīr (mutarjim wa muḥaššī). 1975. *Qur 'ān karīm*, mutarjam wa muḥaššā bi-l-luḡat al-turkistāniyya, al-ṭab'at al-rābi'a, Karācī [: n. p.] (tawzī': Maktaba dār al-'imān (al-Madīnat al-munawwara)), 1395 H. [『聖なるクルアーン』]

英語

McChesney, R. D. 1998. "Central Asia's Place in the Middle East: Some Historical Considerations," D. Menashri, ed., *Central Asia Meets the Middle East*, London: Frank Cass, pp. 25-51.

Olcott, Martha Brill. 2012. *In the Whirlwind of Jihad*, Washington DC, Moscow, Beijing, Beirut and Brussels: Carnegie Endowment. [Kindle版]

ロシア語

Borovkov, A. K. 1958. "Ocherki istorii uzbekskogo iazyka, III (Leksika sredneaziatskogo tafsira XII-XIII vv.)," *Uchenye zapiski Instituta vostokovedeniia*, t. XVI, str. 138-219. [『ウズベク語史概説3(12~13世紀中央アジアの解釈書の語彙)』『東洋学研究所紀要』]

———. 1963. *Leksika sredneaziatskogo tefsira XII-XIII vv.*, Moskva: Izdatel'stvo vostochnoi literatury. [『12~13世紀中央アジアの解釈書の語彙』]

Dmitrieva, L. V. 2002. *Katalog tiurkskikh rukopisei Instituta vostokovedeniia Rossiiskoi akademii nauk*, Moskva: Izdatel'skaia firma «Vostochnaia literatura» RAN. [『ロシア科学アカデミー東洋学研究所テュルク語写本カタログ』]

Muminov, A. K. 2015. *Khanafitskii mazhab v istorii Tsentral'noi Azii*, Almaty: Qazaq entsiklopediyasi. [『中央アジア史におけるハナフィー法学派』]

Validov, A. 1916. "O sobraniakh rukopisei v Bukharskom khanstve," *Zapiski Vostochnogo otdeleniia Imperatorskogo Russkogo arkeologicheskogo obshchestva*, t. XXIII, vyp. III-IV, str. 245-262. [『ブハラ・ハン国における写本コレクションについて』『帝立ロシア考古学協会東洋部門紀要』]

(ウズベキスタン・ムスリム宗務局*)

(東京外国語大学世界言語社会教育センター**)

(中部大学人文学部***)